

『道賢上人冥途記』・『日藏夢記』備考

——史実との関係、ならびに登場人物、全体構成、表現の相違等をめぐって——

竹 居 明 男

はじめに

十世紀前半頃の在世とされる道賢上人日藏の冥界遍歴を主題とする独立した記文は、今日、『扶桑略記』所引本（『道賢上人冥途記』）と、分量的にはそれに数倍する、『北野文叢』所収本（大和永久寺所伝。『日藏夢記』^①）との、少なくとも二本があつたことが知られている。しかしながら、分量のみならず、内容的にも、また表現等においても多大の相違点を有する前者（以下『冥途記』と略称し、小稿での引用は新訂増補国史大系『扶桑略記』による）と後者（以下『夢記』と略称し、引用は神道大系『北野』による）との関係をはじめ、それぞれの成立年代と制作の動機や目的、さらには天神信仰の形成・展開の上で果たした役割等々、なお確定するに至っていない問題が少なくないのが現状である。

右のような研究の現状を少しでも打開して行くためには、なお当分の間は、両本についての様々な角度からの地道

なアプローチが必要であり、本書『日藏夢記大成』における『夢記』本文を中心とした諸資料の完備は、その意味でも一つの画期をなすものと言えよう。一方、本書研究篇中の小稿は、(追記参照)その本文編の成果を参看しない段階での、まことに些細かつ粗雑な覚書にすぎないが、現時点で気づいた若干の問題点についての私見を記し留めて、さらなる検討の捨石にしたいと思う。

両書の成立年代・相互関係等についての、現在の私見

そこで、まずは両書の相互関係等について、改めて現時点での私見を示しておくことにしたい。

現存のテキストによる限り、まず『冥途記』は、道賢上人の冥界遍歴体験を天慶四年（九四一）のこととしているが、『夢記』は、その年次を明記せず、末尾近くにおいて、満徳法主天（宇多法皇を指すと推定される）の日藏への伝言中に「天慶三年（九四〇）を太政元年に改称せよ」という趣旨の一文があるのみである。さらに、十二世紀末期頃成立の『北野天神縁起』は、こうした記文を摂り込んで「日藏六道めぐり」の段を構成していると見られるにもかかわらず、日藏冥界遍歴の年代を承平四年（九三四）のこととしており、こうした実態からしても、道賢上人日藏の冥界遍歴が、動かしがたい年代の史実などではなく、所詮は、年代も含めて仮託されたものであることを暗示しているよう。

では、右二書は、それぞれ何時頃の成立であろうか。まず、『夢記』については、その内容の骨子を詠みこんだ、大江匡房作「参安楽寺詩」（『本朝統文粹』巻一所収）の制作年代である康和二年（一一〇〇）が、最も限定された下

限となろう。また、同じく大江匡房著『本朝神仙伝』第三十七「沙門日藏事」中にも「昔金峯山にして深き禪定に入りて、金剛藏王並びに菅丞相の霊に見えけり、事は別記に見えたり」との記事がある⁽²⁾ほか、当然ながら『冥途記』を収録する『扶桑略記』の成立年代も下限の手掛かりとなるが、『扶桑略記』についても、近時、大江匡房を監修者の立場とした編纂者集団によって、最末記事の寛治八年（一〇九四）三月二日以降の約三年半の間に本文が成立したとする学説が提起されていることは⁽³⁾、その下限年代の限定のみならず、結局すべて大江匡房にかかわって来る点も大いに注目されるところである。そして、実際の成立年代が、それら下限年代より何時までさかのぼりうるかは内部徴証によるほかないが、『扶桑略記』が同記を、全文ではなく、抄録している可能性も皆無とは言い切れない以上、決め手を欠くのが現状である。ただ、それでも、菅原道真の霊の呼称「日本太政威徳天」が、道真への太政大臣追贈の史実を踏まえたものであるならば、正暦四年（九九三）閏十月以降の、また「上下俱称火雷神、尊重猶如世尊」という道賢の文言について「上下」の「上」が天皇行幸を示唆しているとするならば、さらに下って北野社行幸の最初である、寛弘元年（一〇〇四）の一条天皇の行幸以後とみなさざるを得ない、との解釈も提示されていることが、注意されよう⁽⁴⁾。この点は、同内容の記事を含む『夢記』にも当然あてはまることは言うまでもない。

次に、『夢記』の成立についても、その絶対年代を確定するには未だ至っていないが、恩頼堂文庫蔵『北野天神御託宣記文』に最も早く抄録されているから、同書の成立年代が一つの目安となるが⁽⁵⁾、より限定しうる下限としては、慈尊院僧正栄海撰『真言伝』巻四の僧正観賢伝、ならびに巻五の日藏伝には、明らかに『夢記』の内容に基づく記述があるから、同書の成立した正中二年（一三二五）があげられよう。さらに、解脱上人貞慶作『春日大明神発願文』の「彼日藏上人……上詣兜率内院、下見閻魔王界、事境之奇特、具如別記」は（同人作の『別願講式』にも同趣

旨の文章が見える⁽⁶⁾。、いずれかと言えば『冥途記』よりも『夢記』の方を指す確率が高く、したがって貞慶の歿年である建保元年（一二二三）まではさかのぼらせることも可能であろう。

一方、『冥途記』との相対的關係については、『冥途記』には見えない記事や表記の検討の結果、大方の見方とは逆に、現行の『夢記』のテキストは『冥途記』より遅れると見るのが私見である⁽⁷⁾。なお、この私見について、『夢記』中に「延喜通宝」は見えるが、天徳二年（九五八）以後に用いられる「乾元大宝」は見えないことをもって、下限を押さえ得るという批判も出ているが⁽⁸⁾、前述の通り、『夢記』には「天慶三年」の年記があつて、それに合わせた記載と見られるから、その事実は下限年代の根拠にはなり得ないと考ええる。

以上いずれにしても、両書の成立年代と、制作の動機ないし目的とは相関性があるはずであり、現時点では、なお両方とも確定しがたく、今後の、多方面からする一層の究明が必要な所以である。

『冥途記』・『夢記』と史実との関連についての再考

さて、『冥途記』・『夢記』の内容上の特徴の一つは、一般に藤原時平一派の陰謀と目されている菅原道真左遷の罪を醍醐天皇一人に帰して、同天皇と臣下三名に地獄（実際には「鉄窟（苦所）」の苦しみを与え、ひいて醍醐天皇が道賢上人日藏に自らの抜苦のために、現世にもどって種々の仏事を行なうよう依頼する点にある。その仏事の内容は、両書で相当に異なり、要約すると、『冥途記』では

・一万卒塔婆を起てるよう、摂政大臣（藤原忠平）に告げよ。

というだけであるのに対し、『夢記』では

・一万卒塔婆を起て、三千人の度者を給すること、そして一々の卒塔婆には「法華・涅槃首題、如来証菩提及諸行無常等一偈、并仏頂随求無所不至等大秘密」を書いて、「七道諸国各々名山大海大路辺」に起立して一日に同時に供養し、度者は、諸寺諸山の練行清淨沙弥を募って一日に度せしめ、智行具足の名僧三百口に三千人の度者を請じて大極殿の前で「仏名懺悔之法」を修するよう、摂政大臣（藤原忠平）に告げよ。

・国母（藤原穩子）に申すべき事柄（「不記」）

・道賢上人日藏には、方広仏名経を主上（朱雀天皇）・国母（藤原穩子）の御服に書き、一万三千仏図（一万三千枚の仏画、は誤解）を用いて、宮中・京内・五畿内諸国を遊行し、万民を引率して「懺悔之法」を修し、「種々香華飲食伎楽歌頌」をもって一万三千仏・方広仏名経を供養するよう、道賢上人日藏に依頼する。

のごとく、格段に豊富になっている。

さて、かつて拙稿⁽⁹⁾において、以上の記載と、『冥途記』・『夢記』両書にのみ独自の「日本太政威徳天」なる呼称の由緒との二点に関係すると目される史実を列挙したことがあったが、今回は、それらを大幅に増補・訂正して改めて揭示したいと思う。なお、*の記号を付したものが今回の増補であることを示し、「――」内の典拠表示には、『大日本史料』（史料と略称。以下同様）の該当箇所の表示を新たに加えた。また今回も、藤原忠平創建の法性寺造営に関する史実は、別稿⁽¹⁰⁾に譲って省略していることをお断りしておきたい。

*延喜九年（九〇九）十二月二十四日、東宮（崇徳親王。のちの保明親王）御仏名がある。「貞信公記抄。史料一

ノ四、一九九頁〕＝東宮御仏名の初見

延喜十年（九一〇）、無動寺の相応、「引導六道衆生」のため阿弥陀仏・六観音を造り、また「鎮護天下国土」のために「半出五大尊并般若菩薩」を造像し、三千仏名經一部を書写し、さらに十二月一日より三日間仏名懺悔を修する。以後、毎年欠かさず。〔天台南山無動寺建立和尚伝。史料一ノ四、二七五～六頁〕

延喜十九年（九一九）十一月十八日、藤原忠平、元慶寺に修善を始め、「五大像（ママ）・万基塔」のことも始める。十二月十三日には、新図五大尊供を行わせる。〔貞信公記抄同年十一月十八日、十二月十三日条。史料一ノ五、一七九頁〕

延長三年（九二五）三月十日、藤原忠平、「為舎怨靈」に書写した四卷仏名經等を蓮舟上人に講読させる。〔貞信公記抄。史料一ノ五、七八五頁〕

* 同年閏十二月二十一日、宮中凝華舎にて東宮（寛明親王。のちの朱雀天皇）御仏名がある。〔貞信公記抄。史料一ノ五、七七九頁〕

* 延長五年（九二七）、醍醐天皇、「一万仏像、一万塔婆等」を修補する御願を立て、尊意が「仰旨」を奉じる。〔尊意贈僧正伝逸文（日本高僧伝要文抄二所引）。史料一ノ七、二五四～五頁〕

延長八年（九三〇）七月二十一日、「天台阿闍梨五人」を請じて、宮中常寧殿において五壇法を修する。また、醍醐天皇御不予により、延暦寺に白檀五大尊を造り始める。〔日本紀略、扶桑略記。史料一ノ六、二七一～二頁〕

* 同年八月九日、御不予により、度者五百人を定めらる。ついで十九日には、度者一千人を給する。〔扶桑略記、

日本紀略。史料一ノ六、二七三頁〕

* 同年十月十二日、醍醐天皇の後山科山陵に卒塔婆三基を立てる〔慶延記。史料一ノ六、三五九頁以下〕

* 承平元年（九三二）二月十四日、「千人度者」に関する官符案を左中弁紀淑光に給する。〔貞信公記抄。史料一ノ六、四四九頁〕

* 同年四月十三日、宇多法皇、摂政忠平に度者のことを命ぜらる。〔貞信公記抄。史料一ノ六、四三四頁〕

* 同年五月二十六日、千人の度者のうち百人を定める。〔貞信公記抄。史料一ノ六、四四九頁〕

* 同年八月二十六日、「延長千人度者」の度縁に請印する。〔北山抄七・都省雜事。史料一ノ六、五六二頁〕

同年十二月一日、天台座主尊意、延暦寺中堂において初めて仏名懺悔を修し、以後恒例となす。〔華頂要略百二

十・天台座主記。史料一ノ六、五九二頁〕

* 天慶元年（九三八）八月二十日、官符を諸国に下して、仏像・塔婆各一万を修補し、もって震災を攘わしむ。

〔尊意贈僧正伝逸文（日本高僧伝要文抄二所引）。史料一ノ七、二五四～五頁〕

天慶二年（九三九）十二月二十五日、藤原忠平、六十賀仏事を法性寺に修した際、昼は読経し、夜は仏名を唱える。〔貞信公記抄。史料一ノ七、五五三～五頁〕

天慶三年（九四〇）八月二十九日、紀伊国が南海凶賊のことを奏するにより、延暦寺に五壇法を修する。〔日本紀略。史料一ノ七、七八〇～一頁〕

* 天慶五年（九四二）三月十七日、皇太后穩子、法性寺において涅槃經を供養する。〔日本紀略、本朝世紀。史料一ノ八、七六頁〕

天慶八年（九四五）四月十五日、藤原忠平、広隆寺に二百本の卒堵婆を立てさせる。先に法性寺辺に立てさせた三百本と合わせて、五百本となる。（貞信公記抄。史料一ノ八、五六七頁）

*同年六月二十四日、藤原忠平、百部法華經書写のことを定める。（貞信公記抄本年六月二十四日・三十日、七月六日条。史料一ノ八、四六四～四五頁）

天慶九年（九四六）十二月二十六日、朱雀院において御仏名がある。（日本紀略、貞信公記抄、朝忠集。史料一ノ八、七五〇～一頁）＝院御仏名の初見。

天曆三年（九四九）正月十四日、右大臣藤原師輔、関白忠平の病のために、天台座主延昌に大威徳法を修せしめる。（日本紀略、九曆。史料一ノ九、三三三～四頁）

§ § § § §

なお、年末恒例行事の御仏名については、醍醐朝・朱雀朝を通じてほぼ毎年確認される。

先に要約した『冥途記』ならびに『夢記』の記述は、以上に挙示した史実と直接・間接に何らかの関係を有するものと私は考えるが、とりわけ、延喜二十三年（九二三）の年、延長に改元）三月の皇太子保明親王薨去、延長八年（九三〇）六月の宮中清涼殿落雷、同年九月の醍醐天皇崩御の一連の時期に前後する、一万基塔（卒塔婆）・千人度者に関する史実は、従来、それらの意図ないしは意味付けは殆ど等閑に付されてきただけに、大いに注目されるところである。

『日藏夢記』のみに登場する実在人物をめぐって

【仁敷上人。付、宇多法皇】

『夢記』には、まず、釈迦牟尼化身の藏王菩薩が、道賢上人日藏に対して「汝、護法菩薩為師、重受淨戒」と述べたのに対し（ここまでは『冥途記』にも記述がある）、日藏が「不知護法菩薩、名是誰々」と尋ね、これに藏王菩薩が答えて「諸菩薩多、日本国興仏法僧□□、護法者仁敷上人是也、諸山多有菩薩權力、弘仏法利生人間不知也」と述べるくだりがある。その仁敷が実在の僧侶であることはすでに指摘したが⁽¹⁾、ここに改めて管見の限りでの彼の経歴を掲げると左記の通りである。

貞観十七年（八七五）生誕。〔享年に基づく逆算〕

※世系は、藤原内膳流、但馬守従五位下数守の孫、従五位下在淵の子で、俗名は永房。〔尊卑分脈一ノ三八頁〕

延喜八年（九〇八）十月十日、興福寺維摩会において研学豎義を勤める。時に年四十四⁽²⁾、臘十五。〔維摩会講師研学豎義次第、三会定一記。史料一ノ三、九六五～六頁〕

延長四年（九二六）正月十三日、令乾・仁敷を請じ、齋食せしむ。〔貞信公記抄。史料一ノ五、八八九頁〕

同年十一月三日、仁敷を明年の維摩講師と定める。〔貞信公記抄〕

延長五年（九二七）十月十日、興福寺維摩会において講師を勤める。時に年五十三、臘二十七。〔維摩会講師研

学堅義次第、三会定一記、貞信公記延長四年十一月三日条。史料一ノ五、九四八頁〕

承平元年（九三二）二月二日、「仁敷師」が藤原忠平のもとに來り、別当基繼を僧正に任じられんことを請う、

興福寺僧の意向を伝える。〔貞信公記抄。史料一ノ六、六〇二頁〕

同年三月十五日、角寺（海竜王寺）別当に補任される。〔貞信公記抄。史料一ノ六、四二七〜八頁〕

同年十月二十七日、權律師に任じられる。時に五十七歳。〔興福寺本僧綱補任。史料一ノ六、五八三〜四頁〕

承平五年（九三五）十月十二日、律師となる。時に六十一歳。〔興福寺本僧綱補任。史料一ノ六、九四四〜六頁〕

天慶元年（九三八）八月二十九日、法務に補任される。〔貞信公記抄天慶元年八月二十八日条、興福寺

本僧綱補任、東寺長者補任。史料一ノ七、二六〇〜二頁〕

※この時、貞崇が上臈の仁敷ら四人を超えて權少僧都となる。

天慶二年（九三九）正月八日、貞崇が後七日御修法の阿闍梨を勤め、仁敷が交名を読む。〔後七日御修法阿闍梨

名帳。史料一ノ七、四〇六頁〕

同年正月十四日、御齋会内論義に際し、貞崇が香水を散じ、律師仁教^{（ママ）}が交名を読む。〔吏部王記逸文（御實抄所

引）。史料一ノ七、四〇八〜九頁〕

同年三月二十日、「仁敷律師」、写經・誦經等を修せしめた願文を藤原忠平のもとに将来する。忠平、茶を勧め禄

を施す。〔貞信公記抄〕

同年八月十九日、諸寺別当及び三綱等の功課覆勘の後、これを重任せしめんことを上奏する。〔同日付太政官符

（政事要略卷五十六所載）。史料一ノ七、八二九〜三〇頁〕

天慶三年（九四〇）十二月十四日、権少僧都に転任する。時に法務、六十六歳。〔興福寺本僧綱補任。史料一ノ七、八〇四～五頁〕

天慶四年（九四一）三月二十日、去年八月十九日の仁敷の上奏により、諸寺の別当及び三綱等の功課を覆勘するの後、これを重任せしめることとする。〔同日付太政官符（政事要略卷五十六所載）。史料一ノ七、八二九～三〇頁〕

天慶五年（九四二）五月七日、石清水以下十一社に祈雨御読経すべきことを定め、松尾社は「権律師仁敷」〔マヤ〕があることとなる。〔本朝世紀。史料一ノ八、一三一～二頁〕

天慶八年（九四五）八月二十三日、藤原忠平、「仁僧都」を招請して興福寺別当のことを問う。〔貞信公記抄。史料一ノ八、四九一頁〕

同年九月一日、源兼忠朝臣が藤原忠平を訪問し、「仁敷僧都」の病氣見舞いのついでに出家すべし、との左大臣仲平の消息の内容を伝える。〔貞信公記抄。史料一ノ八、四九二頁以下〕

同年十月十四日、興福寺臨時試経につき、平源僧都及び「仁敷僧都」に別当せしめることを定める。〔貞信公記抄〕

同年十二月二十九日、少僧都に補任される。時に法務、七十一歳。〔興福寺本僧綱補任。史料一ノ八、五四五～七頁〕

天曆二年（九四八）十月十九日、権大僧都に任じられる。時に法務、七十四歳。〔興福寺本僧綱補任。史料一ノ九、二六九～七一頁〕

天曆三年（九四九）六月二十二日、寂する。時に七十五歳。（東寺長者補任、興福寺本僧綱補任ほか。史料一ノ

九、三七七～七九頁）

管見では以上の経歴が知られる、法相宗興福寺僧の仁敷については、他に、承平七年（九三七）の興福寺維摩会に際して、若年時の僧良源の資質を見抜いた逸話があり（『慈恵大僧正伝』。なお史料一ノ六、九四三～四頁や『後拾遺往生伝』巻中などは、これを承平五年度のこととしている）、「為学道之長、知人之鑒」（『慈恵大僧正伝』）、「尊意卒後、仁敷独法務、十余年」（『東寺長者補任』）といった高い評価があつたほかに、「嵯峨僧都」と呼ばれた（『東寺長者補任』）ことも注意される。ただし「嵯峨僧都」の号の由来は未詳で（後世の『本朝高僧伝』は「常居城西、世人称嵯峨僧都」と記す）、寛空・仁敷に師事した興福寺僧定昭（九〇六～八三）にも「嵯峨僧都」の号があるほか、寛空の跡をついで大覚寺門主ないし別当となっており（以上、定昭については史料一ノ二十、五六頁以下参照）、仁敷の登場と、『夢記』中の大覚寺と思しい記述とを結び付けて、『夢記』は大覚寺再興を目指す勸進を目的に創作され、定昭がそれに関わっていた、との解釈を示されたのが山本五月氏の一連の論考であつた⁽¹²⁾。

しかしながら、山本氏が着目された部分は、複雑な要素を包含し、かつは長大なる『夢記』の内容からすれば、あくまで一部分にすぎず、『夢記』すべてを、山本氏のように限定的に解釈しうるかは、なお検討の余地無しとしな

い。
『夢記』の大覚寺と思しい記述は、満徳法主天（『夢記』では「満徳法主天者日本金剛藏王是也」と明記して、宇多法皇であることが明かされるが、『冥途記』では「満徳天曰」云々と唐突に登場し、宇多法皇であることは直接には明かされない。なお後述）に関わるもので、法主天は、自分は化樂天に生じるはずだが、日本太政天（道真の霊）の

怨心により、その第三使者火雷火氣毒王が様々な災害をもたらしたので、「太政天之悪」を遮るために「卑少之別城」に住むのだ、と述べたうえで、諸々の災難を救い、かの太政天の怨心を調和せんがために抜苦の修法を行ない、かつは主上（朱雀天皇）及び摂政大臣（藤原忠平）に以下のことを行なうよう伝言すべきことを、日藏に依頼する。すなわち、主要なものを要約して挙げれば、

・大威徳天祠及び日本太天祠を建立すること。

・嵯峨野の大沢池に一小島を造り、大威徳城を象った八面楼閣を建てること。

・さらに、その北山に一小堂を建てて、五大明王ならびに護世一切天等の像を安置し、東方には龍に乗った満徳法主天像、西方には鳳に乗った日本太政天像を二王のように造ること。

・その小堂の左右にはそれぞれ「一祚殿」を設け、「天下諸神」「一切神明」を自在に来往せしめて、日本太政威徳天寺と号させること。

・その寺では、毎年四月十五日と十月十五日には法要を行ない、正月一日には大王が行幸して「年中祥福」を祈ること。

・また、浄行僧六口を置いて法華三昧を、阿闍梨一口を置いて真言大法をそれぞれ修させる一方、士兵をもって衛護させること。

・天慶三年を太政元年に、大臣号を摂政大臣に、延喜通宝を太政大宝にそれぞれ改称すること。

・金峯山の権現牟尼に供養奉仕し、嚴寒時の対策として年分度者一人を「冬籠師子」として置くこと。

の「ごとくであり、確かに大覚寺を想起させる記述が含まれることは否定できない⁽¹³⁾反面、それだけでもなく、何よ

り、これらが―前述のように―満徳法主天（宇多法皇）から発せられ、かつはその満徳法主天と日本太政威徳天（菅原道真）の像を東西に配列する結構はまことに特異なものと言わざるを得ない。

そもそも、草創間もない頃の大覚寺についての確実な知見は意外に少なく、管見では

貞観十八年（八七六）二月二十五日、淳和太皇太后正子、離宮嵯峨院を大覚寺となす。〔日本三代実録、菅家文

草卷九（日本古典文学大系本五八九）〕

元慶三年（八七九）三月二十三日以前、大覚寺の側に、僧尼の病氣を治療する済治院を設ける。〔日本三代実録

同日条〕

右同年同日以前、菅原道真、淳和太皇太后正子の令旨を奉じて、大覚寺に僧俗別当ならびに度者を置かんことを請う。〔菅家文草卷九（日本古典文学大系本五九〇）〕

元慶五年（八八二）八月二十三日、山城国葛野郡の田地三十六町を大覚寺の地となす。〔日本三代実録〕

延喜五年（九〇五）正月二十九日、宇多法皇、大覚寺に御幸し、詩臣に詩を賦せしめる。〔日本紀略、古今和歌

集目録。史料一ノ三、四七八頁〕

延喜六年（九〇六）正月二十二日、宇多法皇、大覚寺に御幸し、詩宴を賜う。〔日本紀略。史料一ノ三、六九八頁〕

延喜七年（九〇七）八月八日、聖宝、「大覚道場」において、貞寿に伝法灌頂を授ける。〔延喜十六年十二月九日

付太政官牒（石山寺文書）。史料一ノ三、八一八～九頁〕

延喜十八年（九一八）八月十七日、宇多法皇、大覚寺において、寛空ら七人に灌頂を授ける。〔血脈抄、東寺長

者補任、仁和寺御伝。史料一ノ五、九一〇頁〕

康保元年（九六四）二月、参議源重信を大覺寺別当に補任する。〔村上天皇御記逸文（河海抄所引）〕

程度にすぎない。しかしそれでも、大覺寺は菅原道真や宇多法皇とは意外に深い関係があったことが改めて確認されるところに、さらに後の、天元年間（九七八〜八三三）には、大覺寺が、前出の定昭によって草創をみた興福寺一乗院の兼帯となったとされる点⁽¹⁴⁾も看過できない。

さらに、滿徳法主天言うところの「卑少之別城」は、史実に即して言えば御室仁和寺に比定しうる可能性もあり、もし、しっかりとすれば、大覺寺を想起させる記述の背景には、寛平二年（八九〇）の時点で年分度者二人（一人は天台摩訶止観を学び、一人は真言毘盧遮那業を学ぶ）を置くことを認められた（『類聚三代格』所収同年十一月二十三日付太政官符）仁和寺が、昌泰三年（九〇〇）三月の觀賢別当就任、及び同年十一月の声明業を学ぶ年分度者一人の追加設置（於円堂院。『類聚三代格』所収同年十一月二十九日付太政官符）を契機として真言宗化を進め、やがて大覺寺「取り込み」を図ったといった動向が想像されるかも知れない。

いずれにしても、以上を踏まえて、十世紀の仁和寺・興福寺・大覺寺等の実態や相互関係について、今後もおお、精査していく必要があることを提言しておくにとどめたい。

なお、ついでながら滿徳法主天に関する記述について付言しておく、と、『冥途記』においては「滿徳天」が唐突に登場している点は先に触れた通りであるが、『夢記』においても、蔵王菩薩によって「滿徳法主天者日本金剛蔵王（＝宇多法皇）是也」と明かされるよりも前の記述に、やはり唐突に醍醐天皇自らが「我聖父法主天」と称している箇所があり、現状のテキストによる限り、不自然さが無いとは言えなからう。こうした点は他にも看取されるところ

があり、さらに後述したいと思う。

【重明親王】

先にも触れた、延喜（帝）王こと醍醐天皇が、自らの抜苦のために、道賢上人日藏に種々の仏事の催行を依頼するくだりで、『夢記』のみに「我深随喜、第四親王帰仏愛法念々功德数々及我所云々」という一節がある。その「第四親王」が、醍醐天皇の第四皇子重明親王（九〇六～五四）を指しているとすれば⁽¹⁵⁾、右の一節は、どういう史実を踏まえたものと解されるであろうか。単なる重明親王個人の信仰を越えたものとして、ただちに想起されるのは、醍醐寺の造営・経営を通して、父天皇の追善を期した同親王の姿であろう（ただし、重明親王のみではない）。醍醐寺は、辞書的には醍醐天皇の御願寺ということになるが、それだけではなく、醍醐天皇崩御時、ならびに、それから間もない頃には、端的に言って同天皇追善の最も重要な場であったことは、醍醐寺史を精細にたどっていくことによつて自ずから明らかになるはずである。ただし、紙幅の都合により、その点の究明は別稿⁽¹⁶⁾を期することとし、ここでは、その史実にもかかわらず、『冥途記』や『夢記』においては、醍醐天皇が地獄の苦を受けて、抜苦のために種々の仏事を依頼するストーリーになっている事実をこそ⁽¹⁷⁾改めて問うてみる必要があるのではなからうか。

これに関連して、さらに日本太政威徳天の発した言葉中に、『冥途記』・『夢記』両書ともにであるが、「彼所（＝日本）の国土」有普賢龍猛等盛流布密教、我素愛重此教、故昔（日）怨心十分之一息也」と見えている一節の前半は、天曆六年（九五二）暮に落慶供養を見た醍醐寺五重塔（初層内部の壁画には、両部曼荼羅の諸尊や、龍猛を含む真言八祖像ほか）が描かれた）を意識している可能性もある一方、それにもかかわらず自分の「怨心」は「十分之一」しか止

んでいない、という解釈も不可能とは言えず、こうした一節の真意をどのように読み取るかも課題の一つであろう。

『冥途記』・『夢記』の全体構成、ならびに表現の相違等をめぐって

次に、『冥途記』及び『夢記』の全体構成に関する問題としては、日本太政威徳天が菅原道真の霊であることの紹介（いわゆる自己紹介も含む）が重複して出てくる点があげられる。すなわち、該当箇所を両記それぞれ対応させて掲げてみると

a—1 『冥途記』 太政天曰、我是上人本国菅相府也、

—2 『夢記』 大天即礼三宝了語曰、我是上人本国菅丞相也、

b—1 『冥途記』 満徳天曰、彼日本太政天者、菅公是也、

—2 『夢記』 法主天命仏子云、……彼日本太政天者、菅公是也、

c—1 『冥途記』 (延喜帝) 王……云、……太政天者、菅臣是也、

—2 『夢記』 (対応文は無い)

のようになり、cに相違が見出せる。しかも、この相違に対応して、c—1に連続する(延喜帝)王の言葉「此臣宿世福力、故成大威徳之天」は、『夢記』では「其公宿世福智力故即成大威徳天神」のやや異なった文句で、b—2に後続して(ただし、間に文章が入るために直結はしていない)おり、結局『夢記』では、それが満徳天の言葉の一部となっている、という大きな相違点がある。

さて、ここに「大威徳天神」（『夢記』）という表記が登場していることに着目して改めて精査してみると、まず『冥途記』では、

日本太政威徳天（2）

太政天（5）

日本太政天（1）

天火（1）

の三種の表記が、末尾の「又追註記入死門間夢事」と書かれた、いわゆる追記部分では

太政天神（1）

太政天（1）

大威徳之天（1）

のごとくであり（括弧内の数字は出てくる回数）、「天神」表記が、後者のみに見えることが、まず注意される。

同様に、『夢記』では、まずE・F段では⁽¹⁸⁾

日本太政威徳天（2）

太政天（7）

大天（3）

であったものが、I段では

太政天（2）

天神（2）

太政（1）

また丁段では

太政天（5）

天神（3）

日本太政天（3）

大威徳天神（1）

天（1）

太政天王（1）

大威徳天祠（1）

大天（1）

日本大天祠（1）

日本太政威徳天（1）

のごとくであり、「天神」表記がⅠ・Ⅱ段のみに集中して、たびたび登場していることが注意される。こうした点は、『冥途記』・『夢記』の成立に段階差があることを示唆する⁽¹⁹⁾と同時に、「天神」表記が、すでに北野社鎮座以後の状況を図らずも反映していることをも考えさせよう。その点、『夢記』Ⅰ段に、「大威徳天神」について「其公（＝菅公）宿世福智力故即成大威徳天神、其威徳自在勝諸天神」と述べている事実も、そのことを傍証しているとも考えら

れる。

第三に、両書の地獄の描写における相違―閻魔王の登場の有無―に着目したい。すなわち、追記の形式をとっている『冥途記』の地獄（具体的には「鉄窟」）描写においては、ついに閻魔王が登場していない（もとより『冥途記』の全文中のいずれにも見えない）のに対して、『夢記』では「鉄窟苦所」に至る前段に、日藏の閻魔王宮訪問の話があり、閻魔王自らが階より下りて日藏に向かって「拝揖」したり、「合掌」したり、「礼拝」したりしながら問答している様子が描かれている。なお、『北野天神縁起』の最も古いテキストと目されている建久本においても、『冥途記』ではなく、『夢記』に基づいたと思われる⁽²⁰⁾「日藏六道めぐり」の段のうちに日藏が「其程金剛藏王の善巧方便にて、三界六道をみぬ所なかりけり、其中に天満大自在天神のおはしますところ、并に都卒の内外院、閻魔王宮、地獄などをぞみめぐりたりける」と書き記しているのは、まさにその点に照応しているものである。この相違は何を意味しているのだろうか。

閻魔王が、罪無くして地獄に赴いた人物を拝礼するモチーフは早く『日本霊異記』に見えており（中巻第十九縁⁽²¹⁾）、対象が僧侶となると、『本朝法華験記』巻上「出羽国竜華寺妙達和尚」伝に「（閻）王從座下礼拝妙達」と見えてるのが早い、興味深いことに、本伝の原拠と目される「僧妙達蘇生注記」の諸本（『続々群書類従』ほか所収本、観智院本『三宝絵』付載本、『弥勒如来感応抄』所引逸文）いずれにも、そのようなくだりは無く、したがって、その間に何らかの変化があったことが認められる⁽²²⁾。『冥途記』と『夢記』との相互関係については、そうした差異にも注意を払うべきではなからうか。

「此金峯山」表記——むすびにかえて——

以上、『冥途記』・『夢記』に関して、注意すべき表現、両書の差異等の若干をとりあげてみたが、全体を通じて、ここで何らかの特定の結論を出すには至っていないことは、冒頭にも言及した通りであり、改めて再説はしない。小論の最後に、今一つ、『夢記』のみに見える表現をとりあげて、むすびに代えることにしたい。

それは「法華（経）」と「涅槃（経）」とを併記する表現で、以下に挙示しておこう（『夢記』と密接な関係があると思われる、メトロポリタン本天神縁起の詞書の対応部分が残っている場合は、真保亨『北野聖廟絵の研究』の翻刻によつて、◇の記号以下に併記した）。

1. 始自去四月十六日安居苦行、二時講法花涅槃、三時修真言大法、（B段）

◇承平四年四月十六日より安居苦行して、三時に法華経涅槃経を講し、三時に真言大法を修す、

2. （虫損）涅槃感悦即死、（D段）

◇法花経涅槃経をき、て感悦して即ち死しぬ、

3. （虫損）師法花涅槃経自誓云、（D段）

4. 又成仏子、愛法花涅槃、（D段）

5. 答云、大日釈迦弥勒観音等像、又両部諸尊種々曼陀羅、亦小字涅槃最勝仁王金剛理趣般若等経、亦三部大法儀軌次第等、大仏頂随求梵大陀羅尼日料所転読如此等経也云々、（H段）

◇こたへて云、大日如来釈迦牟尼仏弥勒観音等の像、又両部の諸尊の種々の曼陀羅、又少字の法花経涅槃経最勝王仁王金剛理趣般若等、又三部の大法の儀軌次第、大仏頂随求梵本大陀羅尼日料所転読これらの経なり、

6. 即略説涅槃経諸行無常如来證涅槃偈等、又説法華経寿命品等、(H段)

◇すなはち略して涅槃経の諸行無常等、如来證涅槃等、一切衆生悉有仏性等の偈、法華経の寿命品一品をよみ、

7. 則於中門狗前至誠合掌誦法華涅槃首題名号、(I段)

8. 一々塔婆、法華涅槃首題如来證菩提及諸行無常等一偈并仏頂随求無所不至等大秘密令納、(I段)

◇一々の率塔婆には法花経涅槃経の題目、一切衆生悉有仏性の偈、并法花経の第六の巻の寿命品の自我偈等、又大仏頂随求無所不至等の秘密の法を納むへし、

以上のうち、2・5については、1・6・8におけるメトロポリタン本詞書との対応関係からみても、『夢記』における「法華(経)」の脱字の可能性が高いとみてよいであろう。

さて、これらの傍線を付した表現は、恐らく天台宗の「五時教」思想を踏まえたものではないかと思われる。周知のように、「五時教」とは、天台大師智顗が、『法華経』信解品により、釈迦一代五十年間の説法教化を五期に分け、經典をそれに分類し、仏経中の諸教学を位置付けた教判で、具体的には第一華嚴時、第二阿含時、第三方等時、第四般若時、第五法華涅槃時に分けたものである²³⁾。これが『夢記』のみにしか見えないことの意味もさることながら、同時に、『夢記』述作の宗教的背景として、この点一つをとっても、単純に天台・真言のいずれかに限定することに

は無理があり、むしろ両者を超えた、あるいは両者を包含するような宗教的立場が想定されるのではなからうか。かつての拙稿⁽²⁴⁾では、内山永久寺を一つの可能性として想定してみたが、原点に立ち戻って見るならば、『夢記』述作時の金峯山の動向がやはり最も注目されよう⁽²⁵⁾。その点、『冥途記』・『夢記』ともども、冒頭近くにおいて、道賢上人が「金峯山」ではなく「此金峯山」に入山したと表記しているのは、その立場の現れとは見られないであろうか。

注

- (1) 山本五月「道賢上人冥途記」の成立―『北野文叢』所収永久寺本を中心に―（『佛教文学』第三二号掲載、平成十年三月）。
- (2) 日本思想大系『往生伝・法華験記』所収の訓読文による。拙稿「日藏冥界遍歴譚覚え書」（『古代文化』第二八卷三号掲載、昭和五十一年三月）参照。
- (3) 堀越光信「扶桑略記」（皆川完一・山本信吉編『国史大系書目解題』下巻所収、平成十三年十一月）、拙稿「『扶桑略記』裡書私見」（『國書逸文研究』第一九号掲載、昭和六十二年六月）。
- (4) 山崎裕人「日藏蘇生説話について」（中野猛編『説話と伝承と略縁起』所収、平成八年五月）、今堀太逸「天満天神と梵天・帝釈天―鎮国と衆生擁護―」（日本宗教民俗学研究会第十二回大会報告資料、平成十四年七月二十日）、同「日本太政威徳天と災害―『道賢上人冥途記』の成立―」（大隅和雄編『文化史の構想』所収、平成十五年二月）。
- (5) 神道大系「北野」解題（真壁俊信氏）は「鎌倉時代」と推定する。なお拙稿「『日藏夢記』逸文考―『新訂増補國書逸文』所収「道賢上人冥途記」の補遺をかねて―」（所功先生還暦記念『國書・逸文の研究』所収、平成十三年十二月）。
- (6) 拙稿「道賢上人冥途記」（『國書逸文研究会編『新訂増補國書逸文』所収、平成七年二月）。
- (7) 拙稿「永久寺本『道賢上人冥途記』に関する二、三の問題」（『古代文化』第三九卷一号掲載、昭和六十二年二月）。
- (8) 加島吉春「『日藏夢記』解題と諸問題」（『アジア遊学』第三二号掲載、平成十二年十二月）。
- (9) 拙稿「道賢上人冥途記」と史実」（『國書逸文研究』第二〇号掲載、昭和六十二年十二月）。

『道賢上人冥途記』・『日藏夢記』備考

- (10) 拙稿「怨霊の幻影―五大堂と撰閑家藤原氏―」（『日本思想史学』第一九号掲載、昭和六十二年九月）。
- (11) 注(7)の拙稿。
- (12) 山本五月、前掲論文、同「道賢（日藏）伝承の展開」（『アジア遊学』第三二号掲載、平成十二年十二月）、同「日藏説話の変容と『北野天神縁起』―メトロポリタン美術館本を中心に―」（『立教大学日本文学』第八七号掲載、平成十三年十二月）。
- (13) この点自体は、すでに注(7)の拙稿で指摘した。
- (14) 佐和隆研監修『密教辞典』による。
- (15) 注(7)の拙稿。
- (16) 拙稿「道賢上人冥途記」・『日藏夢記』備考（続）―醍醐天皇・醍醐寺・僧貞崇と両書が「隠した」もの―（『人文学』第七二号、平成十四年十一月）。
- (17) 今堀太逸「天満天神と梵天・帝釈天―鎮国と衆生擁護―」（前掲）。
- (18) 以下の、『夢記』の段分けは注(7)の拙稿による。
- (19) 『冥途記』成立の段階差については、すでに注(2)の拙稿で言及したが、それぞれの段階の年代については、現時点で再考の余地があるものと考えている。
- (20) 注(7)の拙稿。
- (21) 拙稿「『日本霊異記』の冥界思想―特に冥界遍歴譚をめぐって―」（『文化史学』第三三二号掲載、昭和五十一年十二月）。
- (22) 拙稿「僧明達蘇生注記」の基礎的考察」（『國書逸文研究』第一四号掲載、昭和五十九年十二月）参照。
- (23) 『角川古語大辞典』による。
- (24) 注(7)の拙稿。
- (25) 注(2)の拙稿。なお山崎裕人「日藏蘇生説話について」（前掲）でも、『夢記』に「仏教絵花的雰囲気」を看取しておられる。

〔追記〕

本稿は、もともと、早稲田大学の田中隆昭先生を中心とする日藏夢記研究会編として企画された『日藏夢記大成』（勉誠出版）の本文編（翻刻・訓読・現代語訳・注釈）に対する研究編への掲載お誘いにより、平成十四年（二〇〇二）九月初頭に出版社に

入稿し、年内に刊行予定となっていたものである。

しかしながら諸般の事情で、校正刷等が一度も出ないまま約二年近くを経過し、ようやく本年七月に至って、改めて「九月末の最終入稿をめざす」旨の田中隆昭先生の御手紙をいただいた矢先、田中先生が九月四日に急逝されてしまうという思いがけない事態が生じた。その結果、同企画は、将来、テキストを中心とした形で刊行をめざす形に変更され、私の原稿は十月六日に手元に返送されてきたのである。

このたび、同原稿に続いて執筆した続編『「道賢上人冥途記」・『日蔵夢記』備考（続）——醍醐天皇崩御前後・醍醐寺・僧貞崇』両書が「隠した」もの―」が、先に本誌第一七二号（平成十四年十一月刊）に掲載済みであることもあり、急遽、同原稿を本誌に掲載することになった。ここに本誌掲載への経過を簡単に追記して、本稿の内容が基本的に約二年前の入稿時のままで（本追記を執筆した時点で追加補入した箇所が若干ある）、結果として公表の順序が逆になったことをお断りするとともに、読者におかれては続編と併読されんことを希望する次第である。

（平成十六年十月九日）